

震災後、安らぐ居場所は？

東日本大震災で住まいを移転した石巻市の一部世帯を対象に、神戸大と東北大の研究者2人が共同で

「居場所」の変化に関するアンケートを実施している。11年を経て新しい街の整備が進む中、今の居場所や場所への思い入れを尋ね、心や身体の回復状況との関連を調査。今後想定される巨大災害に対し、よりよい復興の在り方を考える。

調査は、神戸大都市安全の約1000世帯に調査票研究センターの近藤民代教授(居住環境計画)と、東北大学院文学研究科の坂口奈央特任助教(災害社会学)が、11月末から進めている。

土地区画整理事業などで元の土地を離れて家を再建した人や、災害公営住宅の入居者が対象。新市街地の「新門脇」と「新蛇田南」

神戸大・東北大がアンケート

復興の在り方探る

「館」などを今の居場所と感ずるかも尋ねた。

住居の移転をテーマに追いつけてきた近藤さんは「住み慣れた場所から切り離され、皆さん居場所を失った。それを再構築しない限り復興はない。幸せと居場所の有無は関係しているのではないか」と調査の意図を説明する。

坂口さんは「被災した人たちそれぞれに暮らしの交差点、思いの交差点がある。調査を通してその場所を見だし、住民の方にも知ってもらいたい。地域のアイデンティティーを問い直す機会になる」と期待する。

回答は21日に締め切り、400世帯に配布。関係自匿名で集計処理して来年3月に結果を公表する。質問票は岩手県の陸前高田市、大槌町を含む3市町計約3協力をしている。



アンケートの準備をする近藤さん(右)と坂口さん=石巻市門脇町